



## 作文3部

### いただきます

湯沢市立稲川中学校 一年 佐藤 紗良

私のお気に入りの風景。それは教室の窓から見える田んぼの風景です。遠くに見える山のすそ野まで続く田んぼを見ると、心が広がっていくような気がします。

そんな田んぼの中の一本道を、私は毎日、自転車で通学しています。

朝、自転車のペダルをこいでいると、そよ風を受けて稲穂が柔らかに揺れているのが見えます。稲穂が手を振って自分を応援しているみたいです。そんな稲穂を見ると、「今日も一日、頑張ろう」と思えてきます。田んぼの道を私は力強くペダルをこぎ、学校へ向かいます。

私がお米に興味をもつようになったのは、小学校の時に言った苗植え体験からです。私達は田んぼに入り、苗を手や機械で植える体験を行いました。

最初に、苗植え作業を地元の人が手本を見せてくれました。しかし、実際に田んぼに入ってみるとぬかるみがかすこかったです。足がなかなか抜けず、自分はこのまま田んぼに吸い込まれるのではないか、と思えるほどでした。だから、前に進むことがとても大変でした。

また、ようやくの思いで苗を植えても、苗がすぐに水面に浮かんでしまいました。自分はきちんと植えたつもりでも、苗は、土の中にさしこまれていなかったのです。私はこの時、仕事の厳しさを知りました。一本の苗を植えるだけでもこんなに苦労をするのです。今まで私はお米のありがたみを感じることなく当たり前のようにして食べていましたが、農家の方は難儀して作っていることを知りました。

また、苗植えの難しさはそれだけではありません。苗を同じ間隔で植えていかなければいけないのです。植えるだけで精一杯の私には「超」がつくほど難しい作業でした。私は、集中して一つ一つ丁寧に苗を植えていきました。

ようやく作業が終わり、自分たちが植えた田んぼを見ると、きらきら輝く水面の中で青い苗が風を受けながら揺れています。この時、私は「命つてきれいだな」と思いました。そして自分の植えた稲が育っていく様子をワクワクした気持ちで田んぼを通たびに見ていました。この苗植え体験学習から、お米は私にとって身近なものとなりました。

中学校に入ると、部活動でお米のことを考える機会をもつようになりました。それは大会時のお弁当です。

私の母はおにぎりを作ってくれることが多いです。最初の頃は、私は「おにぎりなんて地味で見栄えが悪いな」と、密かに思っていました。しかし、お弁当をもっていく機会が増えるたびに、パンよりおにぎりの方が自分が合っていることが分かってきました。その一番の理由は、試合中のコンディションからです。パンよりおにぎりの方が不思議とパワーが出てくるのです。あとで保健の授業でお米とパンの栄養価について教えてもらった時がありました。それが、「なるほど」と納得できることが多かったです。また、それと同時に、お米がいかに日本人に合った食べ物であるのかも知ることができました。

そのパワーの源であるお米は、たくさんの方の手を通して私たちの食卓に届けられます。しかし、お米を作ってくれた人の手間暇に対して、私たちの感謝の気持ちが薄れているように思われます。

私は自分の田植え体験からお米を作る難しさを知ることができました。お米一粒作るのにも一年間の手間暇がかかっています。また、部活動の大会時のおにぎりもよくよく考えれば、母が早朝に起きて作ってくれたものです。そうしたたくさんの方の手間暇のリレーが私たちの食卓を作り上げているのです。お米を作ってくれている人たちに感謝しながら、これからはご飯をいただいでいきたいです。